

「五蘊皆空というものの」

著者	大鳥 学
雑誌名	仏語仏文学
巻	8
ページ	13-14
発行年	1975-12-10
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017546

「五蘊皆空というものの」

大 鳥 学

人間にはふと自分はもう若くはないぞ、今迄一体何をしてきたのかと過去を回顧して慄然とする一時期があるようだ。特に私のようなぼんくらな人間にはその時の衝撃は一層激烈である。何故なら自分の能力からみて挽回は不可能であることを自覚せざるを得ないからである。そして焦燥にかられ乍らも中年期に入る。中年期に入ると、何となく惜春の情耐え難く古きを語り目まぐるしき日々の一時を過す機会が多くなるようだ。想えば私が大学を卒業してからもうすぐ二昔になるが、その間に凡ゆるものが一変した。経済の高度成長の波に乗って、生活環境の変化は言うまでもなく、それに伴い世間の人々のものの考え方も一変した。

勿論私自身の肉体や思考も変化して止まないのであるが、比較的变化しないものは一個人の思い出の中に生きているものだと思うのである。三木先生に対する私の心像や敬意の念は私の肉体がこの世に存する限り一生涯変るものではないと確信している。

多忙に取紛れ、久しくお会いする機会もなく、御全快の折には是非とも御懇情を賜わろうと思っていた矢先、御逝去の報に接し、驚き、且つ嘆き悲しんだ次第である。

三木先生といえば、厳しいなかにも慈愛に溢れた御円満なお人柄と教育に対する真摯なお姿を思い出すのである。多年教育にたずさわった人は多く、また教育を尊重し、その重要性を説く人は少なくないが、心から教育を愛し、信念をもって教導に徹してこられたという点で先生の右に出る人は少ないと私は思うのである。また先生には世話好きな一面があった。私も個人的によくお世話になったことを思い出す。好きで世話をされたというより、先生の誠実さと物事に打ち込まれる熱意とが教え子達への行き届

いた配慮となって現われたのであろう。先生の如きが真の教育者ではないかと思ひ、心から尊敬しているのである。

大学紛争を契機として、最近の教育界は色々な意味で騒然たる感があり、教育制度はいうに及ばず、当然教師像にも大きな変化を来たすことと思うが、しかし先生から受けた御薫陶は不易であると確信している。

私も教育に携わる者として、先生の御指導に基づいて職責を果すべく努力したいと思うのである。

(昭31卒，近畿大学助教授)